
ロックマン外伝 交叉するピジョンブラッド

雪子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロックマン外伝 交叉するピジョンブラッド

【Nコード】

N9362E

【作者名】

雪子

【あらすじ】

まだ、ワイリーナンバーで名乗っていなかったころのシャドーが登場。どうして彼はワイリーナンバーとなったのか！？同じ紅い目をもつ、一体のワイリーが作り出した戦闘用ロボットとの出会いによって、運命の歯車が動き出した。

シーン1 妖月（前書き）

この話の注意点。

- 1・毎度のごとく捏造設定を多用している。（スターとシャドーは同じ地球外のある文明で作られている、など）
- 2・一応前回（それゆけ 時給戦隊アルバイター！）の続き。
- 3・でも、この話のメインはロックマン2前（過去）話だ。
- 4・キャラクターは忍者と歯医者さんに偏っている。

以上のことが許せる心やさしい方々、どうかご覧ください。

あ、それと忘れていました。

- 5・しかも前回同様一話完結ではない。

シーン1 妖月

月夜に浮かぶのは赤い月。

不吉の前兆だという言い伝えがあるが、なんのこともない。月が赤く見えるのは夕焼けや朝焼けと同じ原理。地表に近いところに位置していると月の光は大気中を長い時間をかけて通ることになり、その間に青い光が拡散して、赤く見えるというわけで……人間の目では大根が白く見えるのと同じ原理なのだろう。

人間の目にあわせた目のカメラのモニター越しで映る月を持っている杯に浮かべさせ、飲む。

粹だとか、風流だとかこれもまた人間らしい感情の名の下で嗜む。

今宵の酒は辛口ということもあり、喉が熱い。月に見える赤い妖にやられてしまったようで……そういえばこの感覚、昔に似たようなものがあつた。

苦くても、拙者を溶かす炎の味。

「と、いうわけで先日は酷い目にあつたというわけよ」

E缶で喉を潤しながらスターマンはこの部屋の屋敷の主である、シヤドーマンのところに愚痴をこぼしに来ていた。

単独任務が多いシャドーマンが峙にしているところは何箇所もあり、定期的に帰るところ変えるによって足がつきにくくしている。

博士のために探り当てた極秘研究の書類を提出し、次の任務にはいるまでのつかの間の休み。そういう時に限ってスターマンの諜報能力の高さ、感も鋭くいたためか、時々ひょっこりとタイミングよく顔を出してくる。

たわいのない会話であるが、ナンバーズの動向を知るいい時間である。

「それは災難であつたな。しかし、この地球にどうしてこうもわれわれのような旧文化のロボットやエネルギーやらが舞い込むのやら」

「さあね？ そんなことを疑問に持ったらキリがないわよ。ほら、例えばランファルト遺跡群のラ・ムーンだっけ？ あれだってミーから言わせれば時代遅れのポンコツもいいところよ。星全体を改造して製作者の言うとおりに兵器工房にするという侵略型のやつ。よくもまあ、遺跡となつてあの時まで残っていたものよ」

コサック博士の娘カリン力を攫つて脅すという第四期よりも前の話なので直接スターは関わっていない。研究室に残っているデータを見て知ったことだろう。

「たしか、あれは原住民を根ざしにするって言うことで、保護団体の抗議が殺到、そしてスペース条約に引っかけた製造禁止になつた奴なのに……回収しきれず、地球に残っていたなん驚きよ」

実験のために辺境の惑星に何体か飛ばしたとは知っていたが、まさか第二の故郷になるところにも降り立っていたとは。

冷静に考えれば来ていたというのは可能性がなかったわけではない

から想像できるが、許容できるかは別問題である。
滅んだ文明とはいえ、自分たちを産み落とした文明。

心に抱く感情としてもつとも当てはまるのは【懐かしい】という郷愁の念。でもあの結末には納得もなければ憎悪の対象ではない。あんな心もなく醜く汚れた最後を思い出すたびに虫唾が走る。同じ志、ワイリー博士の地球征服を目指す仲間としてならば……最悪この地球上に居てもただの遺物Aで過ごしているのなら文句や苦情は言わない。

結末を知らず、未だにあの奢れたものたちの命令に哀しくても忠実にしか動けない機械は始末する。それが彼らにとって最良の方法であり、解放に繋がるのだから。

「……」

「あ、ラ・ムーンスシリーズについてのこと、まだシャドーが制作される前の話だった？」

ロックマンの働きによってラ・ムーンの活動が停止したことに感謝はするがスターにとってみれば正直複雑なのはその点だ。

ラ・ムーンスシリーズの危険性は了解済みだと思っていたが、幾分データが古いため、製造禁止、解体しきつたと書類上ではなっていたのかもしれない。最適化した自分より下の世代ならば省略されていてもいたしかたない。

「ああ。それにあの当時まだ……その、記憶が……」

「お互い長い間宇宙空間に漂っていたものね。すぐにこのボディや心に馴染むのは難しいわよ。それにラ・ムーン系は手駒を動かしか

すくするために要らないデータを削除する傾向があるから。博士のデータを元に再生させられたとはいえいろいろ欠落しているところが出たでしょう。リミッター解除ボタンとか」

「リミッターの存在自体忘れていたが、な……」

そのリミッターは既に己にプログラムされている自己修復により、機能自体は取り戻している。

欠落していたところも、目の前のスターに備え付けられている能力により、取り戻している。忘れていた方が幸せだったかもしれない、滅びさった文明のことや己の第一製作者のこともあるが。

「完全に消えてなかったのは、幸運にもラ・ムーンがプロテクトをかけるのが精一杯だったほどシャドーに詰まっているのは高性能だったことね。ミーでも【引き出し】ができる限界のポイントを超えていたらアウトだったし」

上書き保存されていたら、もう戻れないところでもあったし。

それについては情報収集用に造られたのが始めだったシャドーにとって幸運だった。記憶を書き換えようとしても、自身に備え付けられている旧文明製のOSは外部からの記憶媒体に対して消去といったアクセスを一切受け付けない構造である。

今はなき第一製作者でないと解析は不可能だろう。

（第一製作者ならば、今の某を見たら……すぐに不良品と決め付けられ、大幅な性格設定の改良をするだろうな……）

ワイリー博士はそういった記憶媒体や性格設定といった【心】に関する重要なところを【個性】としてそのまま手を付けずにいる。

そもそも自分が作ったロボットのプログラムだってワイリー博士至上主義的な性格の設定をしていない。だが、心をもったナンバーズは生みの親に対する労わりと忠誠感情が湧き上がっているものが多い。

自主性に任せたというのに……自由に選んだ結果が博士の役に立つこと。

博士のためならば自己犠牲も厭わない。

そんな彼らに出会ったからこそシャドーは仲間になりたくて三期メ
ンバーとしてワイリーに目をつけられたことに感謝している。

（スターマンに記憶を引き出されていなければ、ずっと忘れたまま
であつたが……）

シャドーにはくすつと笑い、空になった杯にロボット用のお酒を汲
む。

赤い月が研究所を照らしていた、その日。
あの月と己と同じピジョンブラッドの瞳を持つロボットとの出会いが驚喜の始まりだった。

「博士、博士……ここで寝ていたら風邪を引きますよ」

己は戦闘用であるが、創造主の健康管理、弟たちのメンテナンスをしているうちにすっかり博士の助手というか、一家のおかんというか……巷では強制的に将来の歯医者さんとか言われてしまっている、いつ家庭用に転向してもおかしくなくなってきたというメタルマン。今日も今日とてワイリー博士は未完成のロボットの設計図を広げたまま機械にはやさしいが人間の体には悪い冷房設定の部屋で眠っている。

「ふふふ」

しつかりとペンを握り締めている姿をみて噴出しそうになる。こうなっているときはいくら呼びかけても無駄だ。ならばメタルの取る行動は、つけっぱなしの電気を消し、布団をかけること。

そういえば、七十八時間目だったな、博士が起きていた時間。

「むにやむにや……完成じゃ……メカドラゴン……」

現実はまだ設計図を描く段階だが、どうやら夢の中では完成したらしい。

打倒ロックマンと掲げられたハチマキにあちこちに転がっている栄養ドリンクの数々。

世界征服という野望を胸にここまで情熱を持っているのは我々のためだということを知っている。

父の技術と考えを世界に認めさせるための戦い。

メタルとて最初は漠然としていてわからなかった。もちろんデータにはインプットされていた……良心回路が引き起こす、人間たちの驕りとロボットたちの理不尽な扱い。

しかし、情報を得ているだけで、心には何も感じていなかった。

出来上がったばかりだから、ということもあるが……現実にはロボットに辛い世界だ。

博士に連れられて、街に出たときにやっと理解した。

なぜああまでもロボットに権力と自由をもたせてやりたいと持っていた父の心を。

冷静に造られていて本当によかったと今でも思う。工事現場に無造作に捨てられたロボットたちに感づってしまったとき、人間にあらなかったから。

あの日のことは今でも鮮明にメモリーが映し出せる。

あのロボットたちは人間の都合により生み出され廃棄されていく。彼らには自由意志がなく、ただ壊されるのを待っているかのように働いていた。

哀しい、悲しすぎる。私には自由意志がある……良心回路といったロボット三原則を忠実に守ろうとする強制装置が組みされていない自

分にはあの場で人間を殺めることは容易い。でも、創造主は人間。この人を悲しませるようなことをしていいのか。しかも目の前で。

「メタルマン。つらいか？」

父は私の気持ちがわかっていた。いや、父がそういう考えを持っているからこそ、学会から追われ、私が生まれる要因となったのだからその表現は的確ではない。

父もまた辛いのだ。

「辛くないといえば嘘になりますが……しかし……私はあなたが誇れる息子でありたいですから」

世界征服の礎はこんな小さな感情で動いてはいけない。

もつと多くの仲間がいなければ、達成できないことも知っているから。

そして、博士はいらない殺生を嫌っていることも。

「博士、我々で新たな世界を作りましょう。ですから、カップ麺だけではなく野菜も食べてください」

少しでも、博士の役に立ちたくて。すぐにでもできる健康管理の見直し。

手先が器用に作られたボディなのでことあるごとに博士の手伝いを積極的にこなしているうちに七体も弟が出来、基地防衛用の口ボを手がけている。

恐竜の模型やら本が散らばっているところからすると、次のアイデアがおのずとわかる。

「完成図が出来たら、手伝いますから……今は安心してゆっくりお休みください」

最愛の父に柔らかいタオルケットをかける。

後は弟たちに父を起こさないように静かに過ごすように言い聞かせるだけ。

そつと抜け出し、研究所を後にする。この研究所は本館とは離れとなっていて、少し野外を歩かないといけない。夜のひんやりとした風にあたりながらも父が起きたらまず、疲れが取れる酢ものの煮込み料理で栄養を取ってもらおうと思った矢先だった。赤い月が妖しく光ったのは……。

一瞬のことだった。もし己が戦闘用に作られていなかったら一撃でお陀仏になっていただろう。もともと装甲面が想定よりも弱いという欠点があるのを重々承知していることもあり、防御するよりメタルは回避することを第一に考えている。咄嗟に地面を強く蹴り上げ、光から身を遠ざける。

光るものから避けたために、自分がいた場所の後ろにあつた木が大きな音を立てて倒れた。

「何者！」

最初はクイックが冗談半分で武器を飛ばしてきたと思った。だが、彼のブーメランの音ではなかった。一直線に降り立つ、真直ぐなものではなく、四方から軌道を変えた音。

刺さっていたのは……随分と変わった形の刃物だった。

東洋の忍者というコマンダーが好んで使っていた得物と思われる。

「くくく……この一撃を避けるとは……地球製のロボットとしては性能も判断力もいいようだな」

聴いたことがない声音が静寂だった基地に響く。

「？」

一瞬の早業で数枚のメタルブレードを取り出し、己の目に備え付けられている、赤外線、エックス線をフル稼働し、透視する。

赤い瞳が交差する。

刹那、互いに湧き上がるのは殺気のみ。

赤い月が雲隠れし、一面には闇だけとなる。メタルブレードの稼働音と、刃物が風を切る音しかしなくなった。

理屈はない、やらなければやられるのみ。

メタルはワイリー研究所に土足で上がってきた謎のロボットを処理するために交戦する。

互いはロボットなのだから、メインモニターさえ無事ならば　コ

アさえなんとかすれば時間や金がかろうか修復が可能。メモリーに焼きつかれた記憶媒体を引き出し、情報は読み取れる。

だから四肢がいくら損傷しても構わない。

いつそ首級のみにしたほうが暴走される問題もないのでデータを効率よく抜き取れるものだった。

容赦はしない。

足の速度は時とともにまし、人間の目には達人レベルの動体視力が必要になれば見えもしない高速の戦いが始まった。

曲者が姿を消しているのはすぐに判断できた。

先の手裏剣のおかげだ。軌道を変えることが出来るので厄介だが、先ほどの攻撃と今の風圧からメタルの電子頭脳は瞬時に曲者がどこ

にいるかがわかる。

風が切れる音がする。

メタルブレードを二枚投げ、キン、と音がする。

（一音だけ、か）

おそらくは手裏剣をはじき返した音。

曲者は素早く動いているらしく、先を読んでもなかなか当たらない。メタルブレードを繰り出す音も相手にここにあることを教えているものだから避けるのがたやすいのかもしれない。速さに自信がある者には。

（クイックより早く動くものはいないと思うが……）

己もかの弟よりはスピードが劣るとはいえ、ここまで動きがよいものを相手にするのはめったにないことだった。

破壊指令を受けて、弟たちはほとんど出払っている。今基地に残っているのはたしか、己とバブル。といってもバブルは今、基地のメインコンピュータと直結し、システムに異常がないか探っている。処理速度を速めるために、外部の戦闘までに神経を回せない状態だ。水中用に特化された彼が来ても状況がよくなるとは限らない。

実質今基地を守るのはメタルだけ。

弟たちが任務を完了し、帰還するまでの時間を稼ぐとしても……弟たちが任務先で負傷していないとは限らない。

むしろこの基地は弟たちを暖かく迎え入れるところではないか。

「当たれ！」

今日何枚目かわからないが、メタルブレードを曲者に目がけて放つ。ギユウウンと金属が火花を散らして回転する。

追跡用の機能を付けられていないため、相手に命中しなければ自慢の攻撃力は発揮されないのが難点な武器。反面、軽く、一度に何枚も取り出し投げつけることが可能である。

「む」

侵入者の声。

焦り、それとも余裕？

前者であってほしいが……口数が少ないために判断はできない。

キンキンと鋼鉄同士が擦れる鋭い音。

重圧ある音が絶え間なく、いや投げた数のぶんの音を放つ。手裏剣と比べ音の感覚が短いところから察するに投げ返したものではないのだろう。

その考えは当たっていた。

雲から抜け出た赤い月の光が正解を照らし出す。

「刀、だと」

月夜に映りだされたのは極東の島国の武器。

刃の部分が、黒く塗りつぶしてあるらしく、闇の中では姿が確認しきれなかった。

刃の長さからして小太刀といった方がいいだろう。

「ほう、運もいいらしいなお主。我刀を見られるまで戦えたのは初めてだ。ここは特別に拙者の姿を見せてもいいだろう」

闇が蠢く。

「それが、お前の姿か……」

メタルの喉が唸る。

漆黒の黒装束の忍びが眼下に浮かぶ。

「そうだ。それとお主には朗報を与えよう。拙者は、この研究所の資料を盗みにきたわけではござらぬ」

「ふん、信じられんな」

「お主が慕う創造主ワイリーの首級を狙いに来たわけでもござらぬよ？」

「な！」

（面白い……）

ピジョンブラッドの瞳が大きく開く。

ワイリーの名を口にただけで、目の前の赤いロボットの心臓部の稼動音が早く鼓動する。

戦闘中いかに悪天候や素早い動きに対応しなければならぬことにも見せなかつた動揺をここで見せるとは。

（マスターというものに思い入れがあるということか）

影の男は冷笑する。

シャドーにとつて見れば、メタルがここまで動揺する理由がそのときはわからなかつた。

地球外のオーバーテクノロジーで作られたロボットのシャドーにとつて。

シャドーは偵察用に造られ、身軽な体を長所としている。

深く考えないことによつて同じ機械の体であるはずのロボットを容易く殺める。

ただ命令に従つて情報を電子頭脳に入れておく。それ以外のメモリ―消費は不要としていた。

自業自得で滅んだ自身を生み出した遠い星のこと他人事。

……もしかしたら己のことさえも、たいして意識がなかつたのかもしれない。

ただ、今の彼は創造主を失つたハグレロボットであることには違いない。

電子頭脳に焼き付けられた命令　情報を保存する、それだけが彼の存在意義。

その情報が必要とするマスターがいないのに……ロボットである彼はその情報を請けとる相手に渡さないかぎりなにがなんでも己の自動的に永久保存されたメモリーの保護を最優先にしてしまう。

それで滅びを望めない、望まない機械はたまたま降り立った地球で適応するためだけに地球製のロボットのエネルギーを奪い取り、必

要な情報を搾り取り、残骸にする行為を繰り返していた。

世界征服を狙う悪の科学者のロボットならばさぞかしいいパーツを使っているだろうと、解体し、自分のエネルギーに充てるために乗り込んだ。

「そう……拙者の求めるものは、お主のような強いロボでござる。拙者の一部になってもらおうか」

赤い目が、獲物を捕らえるのか？

「過大な評価には感謝するが、お断りだな。俺の身体を構成しているものすべて、ワイリー博士のもの。螺旋一本も貴様にくれてやるものはない！」
それとも……？

赤い月の妖光が循環液のオイルを躍動させる。

シーン1 妖月（後書き）

E巻発売おめでとう記念と勝手に称して小説書きました。

2で気に入っているメタルマンと3で公式設定と外見が好みのシャドーマン。

ロックマンメガミックスの方では一緒にお酒を飲む間柄らしいのですが、残念ながら、コミックがないので確認はしてません（汗）でも、そのほのぼのとしたコマは見たような……（遠い記憶？）

始めの方のラ・ムーン。黒歴史と名高い、スーパーアドベンチャーロックマンに初登場。この話の内容、ゲームシステムはとにかく（え！）、ワイリー博士のお言葉には思わず、雪子のなかではストックプ高。

株、急上昇ですよ。

ファイバーですよ。

ダララララ

あ、ラッキー（BYコインジャンケンゲーム）

自分のロボットにここまで愛情を持つワイリー博士に感動しました。胸キュンです。

あとがきはここまでにして、では、次回をお楽しみに！

シーン2 緋色の瞳（前書き）

更新が遅れた理由：E缶、買えずにへこんでいました&a m p ; #
8 6 3 1 ;

始めは五期メンバーがうまれて間もないころの話です。
忍者と星の初めての出会いとか、あります。

シーン2 緋色の瞳

一年と数ヶ月前。

髑髏が目印のワイリー研究所。だが、その敷地内には美しい花が植えられている。

ただ、シャドーがいるこのGエリアにある植物は観賞用の花などではない、すべて毒草かあるいは薬草である。

中には皮膚炎やら、腹痛やらを起こす、ロボットには関係ない類を起こすものもあるが。

これでも使い方によっては立派な武器になる。

(それにしても……)

足元に咲く、白っぽい緑の茎につく小さな黄色い花も、見下ろす位置にある、まるでスーパカップをさかさまにしたような薄い桃色の花も、トランペットが吊り下げられたようなオレンジ色の花も、可憐である。それらのなかには幻覚を見せたりする。恐ろしくも美しい花。

ワイリー博士の作り出すロボットは線の丸い可愛らしいモノもあるが、見方によつてはこの花たちと同様に【毒】なのだろう。

シャドーマンは目に付いた切り株に腰を下ろす。小さく息をつく、隔絶されたこのしんと静まり返った緑色の空間、白や赤、色とりどりの花が咲き乱れるそこが、荒みかけていた心を静かに癒していく気がする。

うとうと、そのまま瞼がゆっくりと閉じられ、どてとと自分と同じくらいの大きさを持つ一体のロボットの足音がするまで眠っていた。

「あ、おかえりなさい、シャドーマン」

植物の管理を任されているウッドマン。日課の水まきをしながら久しぶりに顔を出す親友に微笑む。

「ああ、ただいま。それにしても立派に育っているな」
ただすわっているだけで花のいい香りがする。

「うん。みんな、ここの水と太陽がすきだって言うからね。ここの地で育ててくれるお礼みたいなものだって言っているんだ」

植物と意思疎通が出来るのか、檜のおおきなボディは誇らしげに伝える。

戦闘用なのにやさしい心を持っていることに苦笑する人間がいるかもしれないが、我々ワイリーナンバーズには多様の進化を求めているのか、様々な個性溢れるロボットが多い。

ウッドマンのようにやさしいロボットもいれば、冷静沈着なものや、逆に体育会系の熱血馬鹿、スピード狂、わがままやら、寂しがり屋お調子者、はたまた悪戯好き……カラクリ屋敷が好きな自分が言うのもなんだがそれこそ人間みたいにいるんなタイプがいる。この花たちのようにけして同じものがない、オンリーワンである。

ナンバーが新しくなればなるほど感情が豊かになっている気がしないでもない。いや、この場合は上がしっかりしているので下がちゃらんぼらんになってしまっている気も……。

ふと目にとまるのは赤い花。

「ん？ これは？」

「あ、彼岸花のこと？」

学名 *Lycoris radiata*。リコリスというほうがウッドにとってはわかりやすいが、わざわざ日本の名で答えるのは、シャドーは日本語がベシックになっているというから。

作業現場にふらりといったロボットで、ほとんどデータが存在しない謎のロボット。ワイリー博士に目をつけられる前にはほかに何力国が言語機能が備えられてはいたものの、データによると一番よく使われていたものは日本の言語機能。

よく使われているものの言語の方が伝わりやすいので相手にあわせて会話するように配慮している。

「もしかして、メタル兄さんと同じ色だから……」
目がいつちゃったの？

「ちがうでござる」

たしかにシャドーはメタルのことが気になってはいた。

お酒をいっしょに飲める相手は限られているし、考えの浅い自分にしてみれば弱点が切れモノというまったく異なった性格の相手が羨ましく思うことも多い。

「ただ、気になったのでござるよ。そう、そう。これにも毒はあったな、と。ただ、この花の毒は水で何回もさらせばとれるのでこの根の部分からデンプンをとって食料としたからな……」

飢饉の際の緊急食料です。けして良識のある方は試さないでください。なお、根のところの毒はリコリンといいます。

「へえ、そうなんだ……」

「だが、あくまでも非常食。おぬしが作る野菜のほうが博士の口に合おう」

「うん」

博士が少しでもベストな状態で世界征服が行えるようにと、サポートするのをなによりも至上の喜びとするワイリーナンバーズ。各々の特色を生かしウッドは食べ物を作ることにした。

今日の食の安全対策と少しでも経費を抑えようとし、自給自足をしているのであった。

しかもウッドは森林のパトロールのアルバイトをこなしつつ、兼業に近いのだがけて手を抜いてはいない。身体に優しい有機野菜である。

「そういえば、ラボには入った、シャドーマン？」

「あ、まだでござった」

「今ね、新しく五体の弟がいるんだ」

みんなかわいいよ、と。いい笑顔でウッドは新しいシリーズ……五

期メンバーを評価していた。

ラボには完成した弟機たちがぞろぞろといた。

「シャゾー兄さんだゝ、はじめましてえゝ」

赤い、のんびりした奴。

「名前、間違っているぞ、グラビティー……」

こめかみをおさえるのは銚を持つ青いの。

「シャドーマンだぞ」

一つ一つのパーツが石で出来ている、真・岩男。

「すみません。気を悪くしないでください。シャドーマン」

ジェットエンジンを積むはずだったが予算の都合上ヘリコプターになつた空を飛ぶ緑。

新たな世界征服の計画のために作り出された新作たち。

空を飛んでいた緑がシャドーの前に降り立つ。

「既にわれわれの事を博士から聞いているでしょうが、よろしくお願ひします」

「ああ」

久しぶりにワイリー博士が自ら作り出したロボットたちだ。そういつた点では二期ナンバーたちと同じなのだが、赤い長男機があまりにもものんびりしているような気がしてならない。

今まで……二期、三期、コサツクのものであるが四期も先のナンバーが戦闘能力に関わらずまとめ役のはずだが。

「誰が、このグループのリーダーでござるか？」

もしかして、目の前にいるジャイロか？

「申し訳ございません、リーダーは少し所用ででかけております……」

……」
なんと。

五体完成させてあると聞いてはいたが。

意表について、五番目がリーダー格らしい。

ジャイロが何かを拙者の肩から見たらしく、手を振る。

「遅いぞ、スター！」

「ごめん、ごめん。ちょっと星空見ていて……」

「今日は先輩のシャドーマンが帰ってくるから挨拶しろと事前に博士に言われていただろ！」

振っていたジャイロの手が、拳骨となってスターというロボットに降り注がれる。

お星様が室内でもきらきらと輝いた。

「は、初めまして。DWN37スターマンです」

拳骨の後遺症でまだ呂律がうまく回らないらしい。先ほどのグラビティの口調と大差ない。

しかし、彼は衛星基地さえもらくらくネットワークを繋げられる高性能CPUを積んでいるという。それにスターマンとその名の通り、星で作られている。地球外の物質、たまに発掘される未知の金属が使われているのだ。

エメラルドグリーンの瞳を持つ、ロボット。

（メタルの第二アイカメラの色でござるな……）

メタルは当初赤いアイカメラだったらしいがある事情で切り替えたという。

もつともロックマンとの戦いで敗れた後、ラ・ムーンに修復されたときは赤に戻されている。しかし、博士の助手として働くときは緑色にも変わるアイカメラにし直した。

眼球の色はけして無意味なものではない。

読み取る情報を何に重点を置いているか、という証。

赤外線ならば、赤。

エックス線ならば、黒。

緑はたしか情報分析に適しているらしい。

生憎、拙者はアイカメラを付け替えたことはないのによくわからないでござるが。

「あら、あなた……随分いじくられているわね」

「？」

「コアまで傷ついたことがあると聞いていたけど……ワイリー博士がここまでするとは思えないし……あ、もしかして……ラ・ムーンの影響？ それとも……大気圏突入で焦がした？ 宇宙空間に漂っているときにも何かあったのかも……」

話がまったく読めない。

はてなマークが拙者の頭に浮かんでくる。

「ごめんなさいね。今のあなたに言っても無駄よね……じゃあ……」

スターの心臓部が一瞬淡い、光を発する。

光は、不可思議な電波となり、拙者の電子頭脳に入り込む。

な！

この電波は地球では聴いたことがなかった。

そもそも拙者の障壁をいともたやすくスターが突破するとは……あの、……ではないのに……。
これは……。

スターの力によって蘇る、記憶。

そしてその中に……メタルの緋色の目のことがあった。

「ちっ」

赤い月光が夜空を照らす中で、死闘を演じるのは赤と黒の機械仕掛けの人形。

メタルマンは高速で飛び交い、足に備え付けられたジェットエンジンで空気の壁を蹴るように二回はね跳び、手裏剣をかたっぱしから避ける。

忍者にメタルはてにもつ、銀色の歯車を投げつける。

「やるな」

キン。

漆黒の東洋の刀によって 刀を振るったときに出来る衝撃波によって、メタルブレードは誰もいない地面に突き刺さる。

どのくらい時間がたったのか。長いのか、短いのか。メタルには、判断しきれなかった。

はあ、はあ。

メタルは肩で息をしている。

「もう、限界か？」

影の薄ら笑い。

「戯れ言を……」

声がするほうに向かってセラミカルチタン製の手投げ式回転ノコギリの凶悪な音を不審な輩に投げつける。

（と、いったものの……）

冷却水が、流れ落ちる。

今敵対している忍者は素早い。

それはもう認めたことなのに……。

運動量は互角なのに、こっちの冷却装置の熱排出量はすでにオーバーしているらしく、熱が、体内に籠る。

「くっ……」

熱が繊細なコードたちを焦がす、音がしてきた。

平静を保つのも限界に近い、らしい。

（こうなったら、この手しかないか……）

これを使うのは本当に最後の手段である。

電子頭脳が正常にあの仕組みが出せるかを確認する。

どうやら体内の熱にいかれてはいない。いつでも瞬時に出せる。

（あとは……）

タイミングを計る。

「ほう。まだ、諦めないということか」
けて衰えない闘志を見せる。

こいつは、ワイリー様は狙わないといったが、ここの機材や、弟たちに手出しをしないとはいっていない。

自分がここで倒れてしまったならば……確実に次は弟たちにその刃を向けるだろう。

いい、パーツを狙っている限り。

「お前だけは……なんとしても、俺が仕留める」

こんな不特定要素のせいで博士の世界征服計画を遅延させるわけにはいかない。

メタルは覚悟を決め、忍者めがけて突進する。

虚弱装甲の己が。

アラートを出し続ける自己保存プログラムを無視して。

地面に火柱上げて鋸が滑走する。

「ぬ……」

影の赤い目が光る。

こんな、責任感、忠義があるものがむやみに特攻という手段を使うわけがない。

あるとしたら……。

「主の考えがよめぬと思うか？」

何枚かの手裏剣が、メタルの視界をさえぎる。

「な」

メタルの目カメラが手裏剣を追いきれないと、訴えてきた。CPUが極度の疲労で処理が間に合わないといってきた。

（ここにきて……）

酷使され、熱に侵されたボディが恨めしい。

赤外線を発するこの瞳は戦場では隠れた敵をすぐ見つけるには適し

ているが、その精度ゆえに付加は大きいという欠点がある。特に熱を上手く放出できず、溜め込むような状態に陥っているときはその瞳では重過ぎたのだ。

目が、かつてにシステムダウンする。

それは一瞬だった。

体のあちこちが複数の手裏剣によって刻まれ、オイルを流させる。赤いボディをより鮮明に不吉な色を塗り固める。

それでも戦闘用に造られているのは伊達ではなく、すぐに処理おちが解消させる。

こんな無防備な姿を見せることになったのは歯がゆい。だが彼にしてみれば、忍者に近づいてさえいればよかった。

この身が、いかに無様に切り刻まれていようとこの命の熱を噴出す機械が己の思惑通り動き続けていれば。

その願いはむなしく散る。

メタルの、胸先に刃が突き刺さっていた。

どくんどくと鳴り響く機械仕掛けの心臓が風にさらされる。

「うああああ、があああ！」

先ほどの手裏剣によって顔を追っていたマスクも弾き飛ばされていたらしく、鮮明に、妖月の空にメタルの絶叫が響いた。

「いい悲鳴でござるな」

忍者はぬるりとした循環液のオイルが滴る刀をさらに右に傾けさせる。

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

声にならない叫び。

それに、痛いと電気信号が訴えているのに、なぜだろうか……。

「ん、くうう……」

体内の熱が暴走しだす。

刀に塗られているメカの機能を狂わせる液体のせいではあるが、メタルが知っているわけがなく、あまりのことに戸惑う。痛めつけられているのに……感じる、変な感覚に。

今度は口の機能が麻痺してきたのか、うまく潤滑油が飲み込めず、あふれ出て、どくどくと、むき出しの心臓部が鳴る。

「そろそろいいでござろう」

メタルに押し付けていた刀を引く。

ブチブチと音をわざとたたせ、メタルの体内から何かを引き出す。

「あ……」

その何かを見せられたとき、絶望した。

「やはり、この手できたでござるな」

刀に刺さっているのは動力炉を急加速させるための薇。

体の昨日がすべて失ったような気がした。

顔が青ざめ、体ががくがくと震えているのは、けして傷ついたせいだけではない。

道連れにする気だった。

動力炉を異常加速させ、爆発させる気だった。

「たしかにお主の体積を考えれば拙者を確実に破壊するならばいいアイデアであつたでござるな」

影が、口をゆがめながら残酷に、言った。

「……」

影の口元に感じたのは、殺意。

このままで終わらせたくない。

良しも悪しも、メタルはジャンピング土下座の元祖かつ権威、宿敵

ロックマンに何度も敗れようと夢（野望）を諦めないネバーギブ
アップ精神の持ち主ワイリー博士の作り出した息子である。
緋色の瞳に宿る闘志は消えてはいない。

シーン2 緋色の瞳（後書き）

と、E缶買えずにへこむこと数日……アキバにいつて今度こそはと、予約しました〜

ふふふ……今月下旬、楽しみです。

とりあえず、この話は次回が最終話です。

超長編を書くつもりがないのか、とか言われそうですが……ロックマンでは小話、小話でいきたいという、はつきりいえば趣旨でこういう仕様にしています。（というわりには文字数が多いような……）他のところで長編書いているので、ここはある種気分転換も含めて、ロックマンの愛で構成してます。あしからず。

……と書いておきながら近い将来撤回し、やたらに長い話を書いたりしたときは……それも、あしからず。

気分が決まるというのがこのいいところなので。

シーン3 想いを込めた薇（前書き）

某ゲーム誌にチャージキックが一番使えないというコメントがあった……チャージキックを使ってウェーブマン倒した俺ら（当時小学生）に謝れ！（なんで対戦相手がグラビティーなの、あいつの弱点武器確かスタークラッシュじゃ……）んでもって、アロー使いこなしきれなかったときはそれで面飛ばしてたんだよおおおお！（ヘタレプレイヤーのくせに妙に特殊武器使いまくる。ヘタレだからかもしれないけど）

それとこの下にちよつとグロい表現がでてきます。
ロボットなので流血といっても、オイルが吹き出ているぐらいなのですが、苦手な人は注意してください

シーン3 想いを込めた薇

ふと目を覚ましたとき、涼しい風が頬を撫る。

「ん……」

足は随分地上から離れていた。

ブーン、パタパタと聞き慣れた旋音から、自分はすぐ上のナンバーに羽交い絞めにされて空中を飛んでいることが想像できた。

「あれ、ジャイロ……」

首を動かして、自分を運んでいる兄を見つめる。

「起きたか？ まったくシャドー先輩のところでE缶を飲むのはいが、疲れてそのまま寝るといっただけじゃないな。それに、今日はエインパークで新たな屋台のメニューを募集していることもあってアイディアを出し合って試食会を開くって前から聞いていただろ」

「あ……」

メニューが採用されれば、臨時ボーナスがもらえるので結構皆で考えていたっけ。

時給アップのために日々彼らの電子頭脳は働いている！（時給戦隊アルバイターメモ2から引用）

「ごめん、ごめん。忘れていた」

「ふう。まったくリーダーの自覚が今一步だよな。ときどき大事なことを忘れてどっかに一人でふらふらと出て行ってしまっなんて……」

星を見るとか、月を見るとか、星見るとか……あ、二回言った。

「ごめん、て」

「まあ、スターに落ち度があるって俺たちがフォローすればいいだけのことだけだ」

「ひどっ。それは酷いよ、ジャイロ！」

「それにな、俺だつて空、飛べるんだぞ」

ジェットエンジンじゃなくて、プロペラだけど。

「こうやって飛びながら……皆で見るのも、いいんじゃないか？」
なぜか決まってスターは星を見るときいつも一人でいる。

シャドーが隠密から帰ってきたとき以外は。

「ん〜。それもいいかもね……でも、まだ……早い、かな」
「？」

「ミーね、ちょっとした願掛けもあるのよ、皆と星空を見るの……」
寂しげな笑顔。

「スター？」

いつもはアホみたいに愛想いい奴なのに、時々、エメラルドグリーンの瞳は遠くを見る。

それは欲しいものを手にすることが出来ない子どものような目。
五期メンバー、皆不思議に思うその表情。

でも、気がつくともたスターはいつものアホ面に戻る。

「ジャイロ、超特急で基地（ボ口屋敷改造）に戻りましょう」

「言われなくても！」

背中のプロペラの回転速度が上がる。

「そういえば、シャドーに挨拶しないでミーは出たけど……」

「メタル先輩を置いてきたから、大丈夫。ロボ桜でのみ比べするんだとかで盛り上がっていたからな。邪魔しちゃ悪いだろ」

基地でたまたまスターを連れ帰るためにシャドーのところに行こうとしたとき、行き先は同じだからとメタルがジャイロにのっかってきた。

「ふ〜ん。なら邪魔者は消えるに限るわね」

スターはもともと日本酒、焼酎系は好きではない。

それに次の日に遊園地の仕事があるときはお客様をより安全に楽しませるためにアルコール類を一切禁止している。

だいたいお子様と握手するときに酒の匂いが残っていたらイメージダウンである。

「明日、メールでもしてどっちが勝ったのか聞こうかしら？」

夜空に浮かぶ赤い月が拙者のところに来たのかと、数分前思ってた。
まいった。

はて、酒に酔いすぎたのか……。
実際はジャイロに便乗してあの紅月と同じ色のメタルが拙者の隠れ家にやってきただけ。

ジャイロの緑系の機体が丁度家の周りの防風林の保護色になって見えづらく、仮装大賞でよくみる黒子になっていた。
早々と疲れて眠りこけていたスターを慣れた手つきでぶら下げて空中に消えるプロペラ姿を何気なく見送った後、エメラルドグリーンの瞳をしたメタルがシャドーの側に寄った。

「おつかれさま。これは差し入れだ」

メタルの手には口ボ桜がしっかりと握られていた。

「これは気が利くな、メタル。ところで、拙者の記憶が正しければおぬしはまだ明日の朝餉の仕込みの時間では？」

「いつもなら、な。でも料理の試作のため台所を占領するからって五期メンバーたちが代わってくれたからな。もう俺には今日はやることがないってわけだ」

「ほう。だからジャイロがスターを迎えに来たというわけか」

五期メンバーの中では一番機動力がいいのはジャイロだ。

それにお笑い魂が騒ぐのか、つつこみも上手い。スター（ボケ）とは相性（漫才の）がいい。

「ならば今宵はともに過ごそうか」

「そうだな」

にやりと笑いながら酒を置くとともに、ふと他にも持ってきたものに気がついた。つまみだとはわかっていたが、いくつもあるタツパンの中でメタルは一つ取り出す。

「あ、そうそう、そういえばあいつらの試作した料理があるんだが

……」

白いタツパンに入れられたソレ。

メタルはにやけていた……不気味に。

「とりあえず、一口食ってみる」

有無を言わずシャドーの開いている口にメタルはタツパンを開き、入っていた固体物質を右手で押し込んだ。

「んぐっ！」

シャドーの口に入ってきたのは……強烈な刺激物だった。

口の中が熱い、熱いと訴えてくる。

「くっ！」

いつぞやのものと比べるとたいしたものではないのに、これは一体……。目じりから冷却水を流す緋色の瞳は白いタツパンを覗き込む。見ると、真っ赤なポップコーンが入っていた。

「これがあいつらの試作品の激辛ポップコーンだ」

一定の耐熱素材のある奴らには好評だぞ。

してやったりと、メタルはにんまりと笑う。

「メ、メタル……」

いつもは真面目なくせに、どうしてかシャドーといるとふざける。戯れる。

「なあ、覚えているか？」

メタルが妖艶に微笑む。

緑色だった瞳が赤く染まっていく。

「今日という日に何が起こったのか」

ああ。

メタル、もう忘れるわけがなからう？

コアが損傷したときは、祝いも、何も出来なかった記念日。

紅い月が神秘的に残酷にでも優しくも笑いかけていた、あの日……。

威嚇の表情を浮かべていた。

いつも顔を被っているマスクが吹き飛んでいるため、表情が見やすくなっている、メタルマン。

手裏剣によって、体のオイルを循環するチューブのいくつかを傷つけられ、破られ、赤いボディがオイル色に染まっている。

ただ肌は……オイルを流しすぎた人工皮膚は元の無機質な機材を見

せている。

敵に抱えられ、その下の地面はオイルが垂れ流されている。それでも彼は誇り高さを忘れない。

けして忍者の目を、瞳を、背くことなく睨む。

「ほう、まだ主はそんな目をするか」

鋭く、刀身のように斬ろうとする緋色の瞳。

まだ、機械を狂わせる毒が全身を廻りきっていないためだろう。非常にいい瞳をしている。

それゆえに残念でなかった。

あと、少しで拙者の手によって奪われてしまう……意志。

儚くも消え去ったときほど醜いものはない。

「おいしいな……。まったくおいしい……」

忍びの、刀を持った手がメタルの顔に近づいていく。

「なにを……。んぐっ！」

メタルは、あまりのことで絶句した。

冷たい刀が、眼球を傷つけないように繊細に、かつ冷酷に動き出す。

「!!!!!!!!!!!!!!」

悲鳴をあげなかったのはあまりにも……。ショックだった……。右目を挟られるとは思わなかったから。

オイルが噴出していく。

どくんっ！

また、体が熱くなる。

視覚センサーが異常を訴えている。鳴り止まない、警戒音。オーバーヒートする寸前の体。

このままでは……。本当に最後の手段も使えなくなる！

しかし、焦ってはだめだ。

目がどうした、まだ、腕が残っている。

それだけでいい。

右のアームパーツによって隠している、最後の手段が使えるだけで……。

無様に暴れまわることもなく、紅いこの機体は、緋色の右瞳を拙者にすんなりと抜き取らせた。

「な、なんだ……お医者さんごっこでもしているのか……」

「まあ、そう思われても仕方なかるう」
冷酷に、否定もせず拙者は答える。

前にとつた薇と今とつた緋色のアイカメラを大切なもののように懐紙で包み、懐に入れる。

「ふん、敗者の機材の一部をコレクションにしているのか？」

「いや、お主だけ……だろうな」

「たしかに拙者はお主に使われているパーツを己の強化のために狙っている……が、どうしてか……」

なぜ、自分でも不思議だった。

深く考えもせず、自然とこんな行動を起こした。まるで当然のように。

影が思考の波を渦巻かせたその瞬間がメタルの最大の好機だった。

「ふん、その答えは……永遠にわからなくてやるさ！」

力を振り絞って、右手を、影の口元に押し込む。

「んっ！」

「これでも、喰らええツええええええええええええええええええ！」

メタルの右手が、**解離する。**

中からでてくるのはクラッシュボム。弟の武器だが、メタルはある事情で何個かは常に持ち歩いている。もちろんクラッシュマンではないのでボムを制御する能力は持ち合わせていない。

だが、制御する能力はないイコール爆発させることはできないわけではない。

腕が、メタルブレードを隠し持っている場所が、平常時は腕の中であろつと回転するように命令はしない、そこにのこっているブレードをフル回転させる。案の定メタルのハンドパーツはぐちゃぐちゃに壊される。だが、それでいいのだ。その熱エネルギーが火花を散らし、ボムを誘爆するように仕向けるのだから。

「!!!!」

影がしまったと思ったときは遅かった。

大量の火花を吸い取ったクラッシュボムが炎上する。

爆発音が、紅い月の下で轟いた。

一方ボロ屋敷改、ワイリー博士秘密研究所のリビングにて。

「おら、今度はどうだ！」

ジャイロの気合の入った声が響いた。

「ん、できた？」

試食するのはヒートマンである。

わがまま、わが道を行くといったお子様系ロボットではあるが、なんだかんだといって後輩ナンバーの世話を焼きたがる。気のいい先輩である。

彼のお子様の舌を満足させるものがなかなか出来なくて撃沈しているメンバーの中で焼きそばの屋台に従事するクリスタル以外は闘志を失っていた。

そんな中スター、ジャイロも遅れながら創作料理参戦。

本日最後の料理が完成した。

「ん、見た目はただのオムレツにしか見られないよ？」

トマトケチャップとマヨネーズが交互に網状に付けられていることぐらいしかかわりがない、変哲のないオムレツ。

見た目のインパクトは薄いんじゃない？ とヒートは隠語で感想を述べている。

「まあ、食べてみてください、ヒート先輩」

占い以外はまともなクリスタルも自信満々に言っていることだし…
…一口食べようと箸をつけ、食べる。

もぐもぐもぐ。

予想していた卵のふんわりした食感がヒートの口の中で踊る。

トマトケチャップとマヨネーズもコンビを組んでいい感じに……ん、
なんだろ、ソースの味もする……なんで……それにこの面状のものは
はいたい……！

答えは皿の上にあった。

「オムレツの中に焼きそばが！」

クリスタルの作った、おいしい焼きそばが黄色い衣の中に隠されていた。

「料理名はオムそば。ね、いいでしょ」

「うん、これは味いいね　でも、もうちょっと外見を面白く出来ないかな、ほら、このマヨネーズ……スターのバスターみたいにお星様に見てみるとか」

たまたま声をかけたのがスターだったためか、そんなアイデアが浮かび上がった。

「あ、そのアイデアいただきます」

遊園地の屋台に出るファンシーな料理が一品並ぶのもそう時間がかからないだろう。

「あ。それで星になったわけね……」

マヨネーズで星が出来るか試している最中スターはなぜか納得したように呟いた。

「？　スター？」

試作料理をやめて、朝餉用の仕込みをしているウェーブがこの時のスターの独り言をたまたま聞いていた。
そしてスターの物寂しそうな顔を見た。

(……)

地球外の鉱物から作ったとされる、弟機。

目立ちたがり家でひょうきんな奴だと思っているが、時たま見せる何か悟ったような……この表情。

（そういえば、こいつのこの表情を見たのはいつがはじめだったか……）

俺が見たのは……一番古いのでシャドー先輩に初めて会ったときか？
まだスターまでしか完成していなかったあのとき。

シャドー先輩の顔を見るなり、ぶつくさと俺たちには聞こえない声で話していた。

話していたと、思うのはこいつ、自分ではわかっていないけど喋るとき少し変わった癖がある。知っているのは俺とジャイロとチャージにクリスタルぐらいかな？

主に常時ぼけるメンバー（筆頭はグラビティー）ツツコミを入れるメンバーならわかる、癖。

まあ、そんなことは置いといて。

なんだかんだといってスターは地球外のロボットに敏感だし、サーチ能力が長けている。

それに奴らにしかわからない言葉を話せる、みたい、だし……。

不気味とか、不思議に思うことは多いけど……。

まあ、俺たちの仲間であり、リーダーであることはかわんねえし、あんまり気にしないことにしている。いつか、はなしてもわかるくらい俺たちに理解力ができたら、スターからいつてくるだろうし、な。

ウェーブはそう結論付けると、試作に使用した皿を洗い始めた。

「あのあと拙者は思いなおして、ワイリー博士とともに世界征服を狙うことにしたのでござるな……」

懐かしくも、険悪な出会い。

「目を奪われたせいで、たまたま当時の基地に残っていたのは緑色のやつしかなかったからそのアイカメラになったし！ それに俺はあの時、お前が壊れたと思ったぞ」

気がついたとき、ラボにいた。任務を終えて帰ってきた弟に発見され運ばれたことを知り、そして自分しか残っていなかったと、言われた。

「んー、下半身はほとんど損傷なかったので離脱は出来たでござる。でも刀が犠牲になったのでござる」

刀の陰に足が丁度あったので。

「まあ、俺としては結果的にお前が生きていて本当によかったと思っ
っているぞ」

可愛い弟のウツドの親友だから？

ワイリー博士も頼る隠密のプロフェッショナルだから？

「実際戦ったからこそ、お前の強さがわかるからな。それに……ふふふ」

メタルは突然笑い出した。

「？」

「やっぱり、シャドーお前のこと、紅い月を見ただけでお前と酒が

呑みたくなくなるぐらいに」

「メタル……」

ラ・ムーンの報告でコアが消滅して再生不可能と思っていたシャド
ー。

だが、彼のコアは……結果的には無事だった。
どうしてかは、そう。

「俺はかなり仲間としても好いているからかな。俺の、前の紅い目
と薇をまだ持っているお前に、な」

足を守った刀のように、メタルの抜き取っていた薇がシャドーのコ
アを守るように盾になっていた。

その後完全にワイリーの手によって修復されたが、シャドーの記憶
は少しバランスが悪かった。コアが損傷したためだとか、言ってい
たが。

（ラ・ムーンというのはまったくもって忌々しい、機械でござった）
人間を、人間の作り出したロボットを破滅させようとした、旧文明
の遺物。

シャドーを復元したのは始め、ワイリーのものだからという油断か
らだったが、復元しきったときにシャドーの危険性に気付き、さ
まざまなプロテクトを施し、影抜けの術も出来なくした。

ロックマンに破壊されたとき、コアもなくなっただけだと思っていた、
ラ・ムーン。

でも……あの滅びた旧文明では考えられない、想いで、シャドーは蘇
ることができた。

「仲間……仲間になりたいと願った、拙者の想いのきっかけに、よ
つて、か……」

「どうした、シャドー？」

「うっん。なんでもないでござる」

「えー、話せよ」

「聞きたければ、拙者に勝てばよからう」

飲み比べで。

「いいのか。俺が来る前になんか飲んでいたようだ？」

「ふっ。この程度、ただのウォーミングアップでござるよ」

「そうか……ならば遠慮なしないぞ……」

熱い、液体が喉を焦がす。

赤い妖月が見守る中、宴が開始された。

シーン3 想いを込めた薇（後書き）

やっと、書き終えました……。

なかなか納得できる文章にならなくて……難産でしたね。

ところでなにげに皆勤賞のスターマンですが……このシリーズを書いている最中ために「本家ロックマンを愛する会」（<http://www.geocities.jp/honkeunion/index.html>）の本家ロックマンキャラソート（まだ9ボスがないときの……）をやってみると、29位と、微妙な順位でした（汗）

書きやすいのと好きなキャラとはちがうのでしょうか。

詳しい順位はおまけのほうに載せます。では、また会う日までさようなら。

おまけ 赤いお菓子（前書き）

シャドーに会いに家を出る前のメタルのひとコマ。
理由：本文に突っ込むゆとりがなかったから。

おまけ 赤いお菓子

カメラアイを細かい作業にも適すように緑色に変える。

白衣を着て、横にいるパタパタと翼を揺らし飛んでいるミニメカドラゴンから半田ごてを受け取り、設計図どおりに目の前になる部品を組み立てる。地道な作業　博士が起床するまでの時間、こうして弟たちの部品を一つ一つ作り上げていっていた。

「ふう……今日はここまでにするか」

頼まれていた弟のパーツを仕上げ、一息つく。

「がう」

つぶらな瞳が何かを催促するようにみつめてきた。

「わかつているって。何かおいしいもの作ってやろう」

「きゆるる」

明日の朝ごはんを作りに向かうのだろうと予測しているのだろう。

頭一個分よりすこし大きいぐらいの小型くせにこのドラゴンは食力旺盛だ。

待っていましたと、ミニメカドラゴンは尻尾を振り回しながらメタルマンの歩行速度に合わせて飛ぶ。このミニメカドラゴンを作った経緯は安直にスケジュールを管理するメモ帳なんかが欲しいと呟いた結果……紆余歪曲をへて博士が造り与えてくれたものだ。

どうしてこんなにかっこいいサポートメカになったのかは詳しい説明は省く。小さい故に簡素な人工頭脳しか搭載されていないが、通信機にも代わるので重宝している。

こんななりでもヒートマンの高熱やクラッシュマンの弾薬にも耐えられる装甲も持っていて、第二期戦闘用ロボットに懐いているのが特徴である。

キッチンに向かおうと歩いている最中、余所見をしていたわけではないが誰かにぶつかる。

ピエロのような風体の手の長いロボット……つい先日完成したクラウンマンだ。

「？」

いつもならば悪ガキよろしく、罵声を上げてくるのだが、今日は違う。

涙目で、顔を赤くしていた。

謝りもせずに真っ先に向かうのはトイレ。

はて、何か悪いものでも食べたのか？

リビングを通り抜けようとするとなにやら五期ナンバーズのエプロン姿のクリスタルが皿を赤いものをのせたものを持ったまま考え込んでいた。

「うゝん……」

メタルは少し合いカメラを皿に向ける。エメラルドグリーンは分析しだす。

赤い何かはどうやらポップコーンを赤く塗ったものだ。赤の成分には……。

「激辛ポップコーンは、だめか……」

唐辛子。

「カラーチョコとかみたいにいけると思ったのだが……まったく近頃の若いモンは」

唐辛子で真っ赤になったポップコーンを平然と食べるのはチャージ。

「どうでもいいけど、お子様の舌ではトイレに駆け込むやつでは……

……とてもじゃないが出せないでしょうね」

冷静に判断するのはクリスタル。

話の前後はよくわからないがどうやらこいつらが原因だというのはわかる。

「おい、お前ら何変なものを作っているんだ？」

「……あ、メタル」

時給戦隊アルバイターの後半ナンバーの面々が振り向く。

「クラウンが生意気だというのはわかるが、少しおいたが過ぎないか？」

「いえ、私たちは別に懲らしめるとかそういった類で作ったわけではなく……エインパークで新メニューを出そうというので……」

アルバイターの話によるとこのたびバイト先のエインパークが屋台で新しいメニューを付け加えようと考え、職員全員でアイデアを出し合っているという。

「採用されると特別ボーナスがもらえるもので」「ナパームのその一言で納得する。」

「あ、メタルも何かアイデアをだしてくれないか？」

メタルはワイリー研究所の家事を長い間ずっと（現在進行形で）賄っているので料理全般も精通している。

その主夫の声も聞き入れようとナパームは考えた。

「ん」。とりあえず今明日バイト先ででている全メニューはなんだ？　そこから出ていないものに搾って……ん、まさかポップコーンに唐辛子を塗ったものは……」

辛いものがないからと安直に考え、手につかみやすく食べやすいというので創作した一品なのか。

「今、心に思っているとおりですね」

クリスタルのいうことで悟った。

「頭脳派集団のお前たちにしては安直すぎるな……」

「試作しないとわからないことも多いので。あ、そういうわけで今我々がキッチンを占領しているので朝ごはんも我々が作りますよ」
メタルがこの時間ならば明日の朝の仕込みにきたのだと皆知っている。

料理の試作で長い時間キッチンを占領することもあり、朝餉の用意は自分たちがするという事なのだろう。

「しかし、な……」

連れ添うようにやってきたミニメカドラゴン。

この子になにか食べるものをつくってやらんとへそを曲げられる。

しかし、その考えはまったく杞憂であった。

なぜならハグハグとミニメカドラゴンは唐辛子ポップコーンをおいしそうに食べていた。

「お前もイキル口か」

チャージマンは口元に笑みを浮かべている。

同士がいて嬉しいのだろう。

「あれ、おいしそうなおいがする」

歩くジツポ……もといヒートマンもやってきた。

驚掴みするのは、真っ赤なお菓子。

「燃える〜！」

キャツキヤと喜ぶ姿を見てメタルは一言。

「どうやらある一定の耐熱素材のある奴らには好評のようだな」

ヒートマンにいたってはなんかいつもより炎が増しているようだ。

「どちらにしても人間の子供相手の商売のエインパークには出せないな……」

炎属性のロボットが遊園地に多く来ているとは思えないから。

客観的に冷静に言い放つナパーム。

ポップコーンを口にほおばりある程度満足したヒートはメタルのほうを向く。

「ねえ、メタル。クラッシュボムも頂戴」

「今日はこの唐辛子ポップコーンで十分じゃないか？」

「これとそれとは別だよ」

燃料のおねだり。

第二期兄弟のやり取りを見てチャージはふと疑問に思った。

「クラッシュボム？ クラッシュマンの武器ではなのか？」

「ああ。だが、クラッシュは任務があつて研究所にいらなくなるときが多いから……ヒートがガマンできる子だったら俺経由で与えなくてもいいのだが……」

食いしん坊のヒートのために研究所に待機する＆主夫属性もちのメタルが数個クラッシュボムを持っているのだ。

「クラッシュじゃないから俺は武器としては使いこなせないが、まあ、あつてもなくて困らないものでもないし……わかったヒート。今日は一個あげよう」

「え、たった一個？」

「そういうな。ここにいる弟機と博士の研究費のための試食が待っているんじゃないのか」

遊園地の屋台の出し物ならばお子様舌ももつヒートならば喜びそうなもの。

「うん、それもそうだね」

ヒート納得。

「たしかに。ヒートの兄さんが試食してくれるなんて心強いな」

チャージたちもものすごく期待したまなざしでヒートを見ていた。なんらかしらの恋愛ゲームであつたならば我侭な末っ子タイプとして君臨してしまいそうなヒートである。彼の舌に応えられたものを作り出したら……いける。

明日はホームランだ！

なにげに昔の牛井屋のコマーシャルのキャッチフレーズを連想しながらも、手が器用な弟たちは心強い食の達人によって、上手いものを作ってみせると腕まくりをしていた。

「さて、と……」

想定外の自由時間が出来たメタル。

今日はもうやることもないので寝てしまおうかと思ったが、今まで細かい作業をしていたこともあり、まだ、目が冴えている。

（こんな状態ではスリープモードにしてもたいして疲れが取れないな……）

ならば贅沢にもただベッドのうえに転がっているのもいいかもしれない。

と、思いながら空を見ると、紅い月が輝いていた。

妖艶に。

「……」

奴の瞳に似た月。

口酒をもって、飲みに行きなくなった。たしか、台所にまだ残っていたよな。あと、つまみになるやつも少し持っていこうと再び、キッチンに戻る。

そこは騒がしくなっていた。お子様たちは創作料理を食べていたの
でそんなに大きな声で話などをしていなかったが、五期メンバーが
騒ぎの中心だった。

「あれ、スターがいないぞ！」

「え、ナパーム、本当か？」

「そういえば……シャドー先輩が今日任務を終えて帰ってきたそうですよ」

「本当か！」

「はい、チャージ。占いで」

「……」

「あ、それは俺も聞いた」

「ウェーブマンが言うから間違いないな」

「ちょっとジャイロ、私の占いでは信じないってことですか!」

「ん、僕は信じているからあ、問題ないよあ」

「あ、グラビティー今はそういう問題じゃ……」

「わざわざ説明せんでもいいんじゃないか、ストーン……」

「俺がひとつ走りすればいいんじゃないか？」

「行ってくれるか、ジャイロ？」

「そりゃ、ナパーム……スターのいるところを大体見ると……今日のシャドー先輩の隠れ家って飛んでいったほうが早いところだろ？」

「この中で飛べるのって俺しかないし」

「そういえば、そうだな。リーダーのことは任せる。ワシ達は試作でがんばろう」

（ジャイロが迎えにいくのか……なら……）

便乗するか。

メタルは話を半分聞きながらも、いそいそとシャドーの家に行く準備を進めた。

おまけ 赤いお菓子（後書き）

では、この下からシーン3で予告したとおり、本家ロックマンキャラソートでの順位を発表したいと思います。でも、スターマン（29位）より上のみで。

1	Dr・ワイリー（アルバート・W・ワイリー）
2	プラントマン
3	メタルマン
4	ロック（マン）
5	ブルース
6	スカルマン
7	ジャイロマン
8	クリスタルマン
9	スネークマン
10	シャドーマン
11	トードマン
12	ナパームマン
13	フォルテ
14	ビート
15	エアーマン
16	クイックマン
17	クラッシュマン
18	バブルマン
19	ウッドマン
20	ヒートマン
21	フラッシュマン
22	マジックマン
23	プルート
24	ビーナス

25 Dr・コサック（ミハイルセルゲイビッチコサック）

26 ブライトマン

27 チャージマン

28 ケンタウロスマン

ん……私的には納得。

ちなみにケンタはできればウーマンにしたいところだったりします。

（6のメンツは池原先生バージョン志向）

村岡凡齋さんから感想をいただけて嬉しい！（前作のほうですけど、ね。）スターマンの謎はまだ構想中の発展途上なのでまだアツプしきれませんが、そのうちできるように頑張ります。

では、最後にここでの感想も出来れば、読んでくださっている心優しい皆さん、お願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9362e/>

ロックマン外伝 交叉するピジョンブラッド

2010年10月10日20時05分発行